

巻頭言

21世紀に入ってはや10年目を迎えようとしている。思い返せば、10数年前は「世紀末」ということが煽られかなり辟易していた。それゆえその騒ぎが過ぎれば逆に解放された気持ちになり、科学分野について言えば新たな挑戦や展開が目に見えるようになるかも知れないなどと淡く期待していた。ただ実際はそれほど単純でも簡単に行くわけでもなかった。実際に21世紀に入って10年程たってみると、世の中は金で金を稼ぐような生業がますます幅を利かせたあげく、経済は混乱し、日本はより一層の財政難に向かっているかに見える。そしてそのしわ寄せは科学の分野で言えば、科学を目先の利益に基づいて判断しようとする傾向を一層強めている。さらに言えば若手研究者を、優れた能力や可能性を手間ひまかけて育て上げるべき対象ではなく、使い捨ての資源のようにする世の中に向かっているかに見える。いろいろの問題の中でも、この点は本当に深刻な問題だと考える。

しかしながら、科学を取り巻く環境が八方ふさがりというわけではないと思いたい。昨年行われた公開事業仕分けとそれへの反応は、いろいろなことを教えてくれた。もちろん上に述べたように、科学を取り巻く環境は確かに厳しく、廃止や縮小がいつも簡単にできるような脆弱な土台の上に研究組織が築かれていることを明らかにしてくれた。その一方で、全国民とは言わないが、かなりの国民がこの苦しさの中でも科学が支えていくべきものであると思っているらしいと改めて感じた（楽天的に考えよう）。どこへ消えたか知らないが、「米百俵」はそれなりに支持されているのである。

さらに若手を中心にして草の根的に様々な取り組みが行われたことは、近年身の回りでは聞かなかったことである。また科学というものについて、研究者がもっと発信しようという意見もこれまでに多く出された。こうした取り組みがもっと進むことが、この先を決めるのではないだろうか。「科学が科学になる」ことについて国民の支持はきっと得られるはずである。

若手がのびのびと研究して育つようにするために、我々非若手層がすべき具体的な妙案を持っていない（すみません）。原則的なことを目指して地道にやるしかないと考える。まずは、金がつくからと言って、先の展望がないまま任期のついた職を無制限に造るのはやめ、別の形をもった研究組織を模索し始めるべきだと考える。

古本 宗充(名古屋大学大学院)